『うっとりした魅力』

若山牧水賞の受賞者 穂村さんが日向市で講演

第23回若山牧水賞を受賞した歌人の穂村弘さん(56)=東京都=は1日、牧水の生誕地である日向市を訪れ、市中央公民館で「牧水の魅力」と題して記念講演した。

牧水の母校・坪谷小学校の全校児童16人が短歌を朗詠。十屋幸平市長は、没後90年にあたる今年度に行った記念事業を紹介し、「牧水への理解がさらに深まり、心に残る講演会になることを期待したい」とあいさつした。

牧水愛を語る穂村弘さん(1日、日向市中央公民館)

学生時代に短歌を始めたという穂村さんは、入門書を読んで「かなしい」や「さびしい」などの言葉を使わず、別な物や出来事に託して表現するのがいい歌だと理解していたという。

しかし、牧水は「白鳥は哀(かな)しからずや—」「幾山河越えさり行かば寂しさの—」など直接的な言葉を使っていながら歌の輝きが失われていなかった。

穂村さんは「われわれが普通に感じている喜怒哀楽は一時的なものだが、牧水の喜怒哀楽は永遠。白鳥がどんなに青の世界に憧れても青になれない。永遠に哀しくて寂しい。すごくつらいように思うけど、なぜか牧水の歌にはつらさは感じない。むしろうっとりした魅力がある」と評した。

牧水の歌を朗詠する坪谷小学校の児童

また、「縁がはの君が真紅のすりつぱをふところにして去なむとおもふ」の歌を「振られてしまった恋人に似ている友達の奥さんのスリッパを懐に入れたいという歌」と解説。

「この歌を知った際、僕は牧水に負けたと思った。恋人の写真を懐に入れるぐらいは普通だけどスリッパは入れない。牧水恐るべし。しかも短歌にしてしまう。一方で、白鳥は哀しからずやという永遠への憧れを歌い、でもスリッパもほしい。この幅に、ますます牧水が好きになった」と話した。

会場には短歌愛好者や市民ら約130人が訪れ、牧水愛が感じられる穂村さんの話に笑ったり、うなずいたりしながら聞き入っていた。

2018.2.2